

本書で取り上げる播磨・但馬・丹波・摂津・淡路は、現在の兵庫県全域と大阪府の北中部の大半、京都府の北西部の一部という広大な地域が該当する。範囲が広範だけに、それぞれの地域には特色がある。それらの地域は京都にも近いという好条件だったが、赤松氏、山名氏といった守護家は一五世紀後半から一六世紀前半にかけて衰退し、中央の政局にあまり絡むことができなかったという事情があった。

播磨は南北朝以降、一時期を除いて赤松氏が守護を務めた。赤松氏は西播磨に拠点を定め、戦国時代には置塩城（姫路市）を居城とした。また室町幕府では、侍所の所司に任じられる家柄だった。播磨は瀬戸内海に面していたので、英賀（姫路市）などでは海上交通が発達していた。東寺領矢野荘（相生市）、法隆寺領 鯛荘（太子町）は、戦国時代まで多くの史料を残す稀有な荘園でもある。赤松氏は嘉吉元年（一四四一）の嘉吉の乱で没落したが、赤松政則は応仁・文明の乱をきっかけにして、播磨など三カ国の守護に返り咲いた。しかし、養子の義村の代以降、配下の浦上氏の台頭を許すと、著しく衰退して一地域権力に転落した。織豊時代に至ると、小寺、別所などの国衆が存在感を示したが、播磨国内を統一する戦国大名は登場しなかった。

但馬は南北朝期の前半を除いて、山名氏が守護を務めた。山名氏は室町幕府で侍所の所司に任じられる家柄であり、応仁・文明の乱では強い存在感を示したが、山名宗全の死後は徐々に衰退し、最終的には織田信長に屈した。但馬は生野銀山の鉱山資源が豊富であり、信長や豊臣秀吉も注目した。戦国期以降、山名氏は赤松氏と同じく、配下にあった垣屋、太田垣などの国衆の台頭を許すことになった。

丹波・摂津・淡路は、細川氏の領国だった。丹波西部（兵庫県）は戦国時代になると、守護代家の波多野氏が

台頭し、細川氏に代わって支配を展開した。その拠点が八上城（丹波篠山市）である。このほか、赤井氏、荻野氏といった国衆が注目される。摂津西部（兵庫県域）では細川氏が衰退すると、三好長慶が勢力を築くことになった。織豊時代に三好氏が衰え、信長の時代が到来すると、荒木村重が有岡城（伊丹市）を拠点として支配を展開した。尼崎（尼崎市）や兵庫津（神戸市）は、港湾として大いに発達した。一方、淡路は細川氏が守護として支配を行っていたが、残った史料が極端に少なく、戦国・織豊時代の様相は不明な点が多い。

戦国・織豊時代になると、多くの国では強大な戦国大名が登場し、一国を支配することが多かった。しかし、播磨など五カ国では、南北朝以来の伝統的な守護家である赤松氏、山名氏、細川氏が支配を行っていたにもかかわらず、ついに強大な権力体にはならなかった。そうした群雄割拠の時代を克服したのが信長であり、秀吉だった。その経緯を明らかにするのが本書の目的である。

本書では右に示した政治だけではなく、宗教文化、流通経済、民衆文化、城郭なども取り上げ、幅広い観点から播磨・但馬・丹波・摂津・淡路の地域性を明らかにする。